

験談を評価させる社会実験を日米で行なったところ、回答者の多くは宗教的体験談を受け入れるかどうかについて、自分の宗教的信念と整合する一貫した判断を下すことはできず、社会的文脈に左右された非一貫的な判断をしており、多元主義者であるからといってその非一貫的判断の傾向に差はなかった。社会的文脈にかかわりない一貫性を示したのは、自分の信念に反対するものを一貫して拒絶する排他主義者だけであった。このことは「強い多元主義」という理想像が虚構に過ぎない可能性を補強している。また、その後の日本での社会調査では、信仰者が「神がいる」と考えている理由としては、「自分の心が豊かになった経験があるから」「危ない場面で助かった経験があるから」という曖昧な個人的経験によるものが主流であり、「真実在」についての存在論的な信念はごく少数である。信仰者の多くは宗教的真理(神など)についての存在論的な質問に「分からない」と答え、不可知論的なスタンスをとっている。このような「緩い信仰者」は決して「無自覚」ではない専心性を持つが、非寛容になる必然性も低い。逆に、「強い信仰者」や「スピリチュアリテイ」のほうが非寛容的な傾向が強かった。従来看過されてきた「緩い信仰者」にこそ、明日の宗教の現実的で建設的な希望があるかもしれない。

宗教研究におけるライフストーリーの方法論的意義について

宮本要太郎

発表者は現在、「無縁社会」において宗教はいったい何をなしうるのか、この状況の克服に向けて実際にどのような活動が

なされつつあるのか、またその実態を宗教学的にどのようなとらえればよいのかなどを明らかにするため、主として「釜ヶ崎」をフィールドとして、一般市民の生活空間から排除された人々に寄り添い、連帯し、共生しようと地道に活動が続ける宗教者たちを対象に、もっぱら聞き取りを中心とした調査研究を進めている。

そこで注目したのが、社会学や人類学などで広く使われているライフストーリーのアプローチである。このアプローチを採ること、支援活動に従事する宗教者たちへの聞き取り調査を通じて彼ら／彼女らのライフストーリーを描き出し、その解釈を通じて諸個人の活動がソーシャル・キャピタルとしての生きた働きを表していくアクティヴな文脈を、歴史的・社会的な文脈と交わらせながら、トータルに論じることができると考えた。

しかし、実際に各人の生活史を聞き取ろうとすると、容易でないことがすぐに分かる。ライフストーリーは、個人の「主観」や「解釈」を尊重する点で、「人間中心アプローチ」ともみなされるが、この点で、宗教社会学の分野でこれまで議論されてきた「内在的理解」や「共感的データツッチメント」の考え方は大いに参考になる。もっとも、宗教社会学的な問題設定と異なり、本研究が対象としている人々の活動は、しばしば信仰と葛藤を生じさせたり、時には信仰を相対化するものであって、時系列的な編集を経て一貫性のある「生活史」としての「記録」を作成するためには、聞き取りデータのかなりの蓄積が必要である。

むしろ、インタビューを重ねるうえでより重要に思われてきたのは、ライフストーリーの「記録」の側面よりも「ストーリー」(語り)としての側面である。それはしばしばライフヒストリーと区別されてライフストーリーと呼ばれることもあるが、この概念の重要な点は、ライフストーリーを単に語り手の語りとするのではなく、語り手と聞き手(インタビュアー)との「共同制作」と捉える点である。その時、聞き手は、インタビュアーという相互行為を通して語り手による〈物語世界〉の構築に主体的に関与する存在となる。桜井厚もいうように、一つのストーリーとして語られる過去の経験は「あのとき・あそこ」の物語(物語世界)であるが、語りは「いま・ここ」で聞き手との相互行為(物語行為)の結果として成立するものである。このような見方を桜井は「対話的構築主義アプローチ」と名付けているが、このアプローチに従えば、「語る」という行為は、単に過去の出来事や経験が何であったかを述べるだけでなく、その「語り」に共に参画することを通して、「いま・ここ」を語り手とインタビュアーの双方の「主体」が生きることとなるのである。

ホームレスの支援活動している宗教者たちは、彼らに寄り添いながら支援しているが、単に寄り添っているだけではない。彼らの声にならない叫びに耳を傾け、それに〈声〉を与える(あるいは少なくとも声を発するきっかけを提供する)。彼らに寄り添いながら体験を語らせ、それを共有する。語るという行為を通じて人々は、自己(アイデンティティ)を再び獲得し、自尊心を取り戻し、生きる希望を見出す。別の言い方をすれば、

支援活動に従事する宗教者たちは、その活動を通じて、ホームレスたちの声なき声を語っているともいえよう。インタビュアーである私たち研究者は、その〈声〉に耳を傾ける責任がある。同時に、「無縁社会」における宗教のソーシャル・キャピタルとしての可能性を探求するという点では、実は実践者たちと同じ目的意識を共有している我々としても、研究者としての在りようを常にリフレクシブ(再帰的/反省的)に問い返ししながら、宗教の社会活動にいかなる形で「貢献」できるか、と自問する視座を持ち続けるべきではなかろうか。

ポルピュリオス『ニウンペーの洞窟』における神話解釈

小野 隆一

本発表の目的は、新プラトン主義思想家ポルピュリオスが、その著作『ニウンペーの洞窟』においていかなる神話解釈を行っているか明らかにすることである。

この『ニウンペーの洞窟』は、ホメロス作の叙事詩『オデュッセイア』において語られているニウンペー(山川草木に宿る、美しい女性の姿をした妖精のこと)に捧げられた聖域である洞窟の謎めいた描写のひとつとつを、著者ポルピュリオスが解釈していくという作品である。

本発表では、『ニウンペーの洞窟』の内容を概観することを通じて、ポルピュリオスの神話解釈がいかなるものであったかを明らかにすることを試みたい。

まず、ポルピュリオスは、洞窟そのものの意味するところを解明しようとする。彼は、洞窟も世界も自ずから生じたもので